

# 「ゆ」と日本人に関する文化社会学的研究

— 聖・俗・遊のパースペクティブから —

日 下 裕 弘

## 1. 研究の動機と目的

古来、日本には「成る」文化が存在してきた。和辻哲郎は、日本の風土的特徴を「湿潤」と「変化」とし、そこに生きる人間様態を、「受容的、忍従的」でありつつ「台風の・二重的」性格をもつ存在、即ち、「しめやかな激情」と「戦闘的な恬淡」と規定した。<sup>1)</sup>

今日行なわれているスポーツは、もともとヨーロッパの「牧場的」、「合理的」風土と主体的「健康」観念とによって培われた、卓越性を求める身体遊戯文化であり、日本へは明治初期に移入された。それは、日本の近代化・西欧化、アメリカ化の歩みと共に、「和魂洋才」的、モザイク的に摂取された段階を経て、次第に高度化、大衆化し、担い手の意識もその表層から国際化への道を辿っている。<sup>2)</sup>

また最近では、「生涯スポーツ」の名のもとにスポーツをつぎ木しようとしたり、「リゾート法」のような日本人の余暇に対する行政側からの動きがみられるし、また一方では、日本の新しい、個性的な「遊」のあり方への摸索が始まっている。そうした現実の動きとの関連において、「聖・俗・遊」の図式は有効性を高めつつあるとあってよい。<sup>3)</sup> だが、「遊」の領域には、スポーツの論理でははかれない、より根源的な領域が存在しているように思えてならない。

現在の日本人の余暇活動への参加人口を、「レジャー白書 '88」から見てみると、上位から順に、外食、ドライブ、国内観光旅行（避暑、温泉など）……となっている。また、2日以上「滞在型旅行」の希望としては、「温泉」が60.8%で群を抜いてトップである。

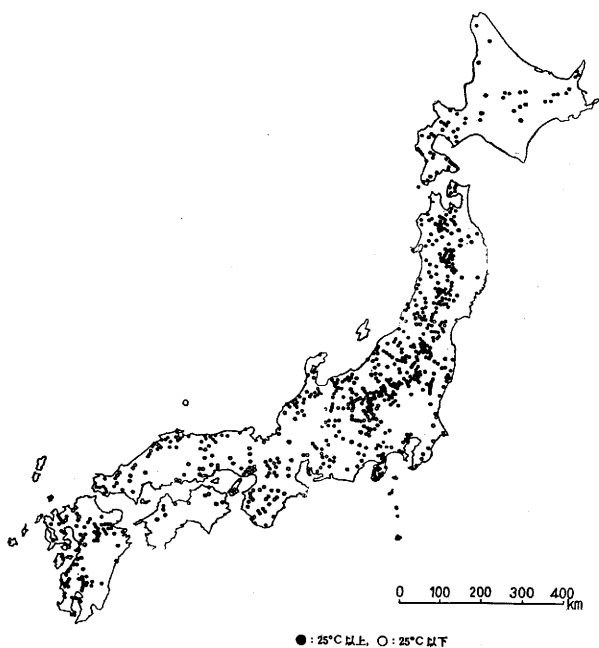


図1. 日本の温泉分布（「温泉学」, p13所収）

多田道太郎は、「ゆ」は日本人のレジャーの基本であるといっている。「ゆ」特有の肌の解放感、「風呂につかっているびりふわとなる」感覚、多田にとってはその意味で、「する」遊びよりも、「なる」遊びの方が「より根源的」<sup>4)</sup>なのである。(図1)

本研究は、日本人にとっての「ゆ」の意味を、聖・俗・遊のパースペクティブ、および階層との関連から考察することによって、今後の日本人の遊び・余暇のあり方を探るための基礎を得ることを目的としている。

## 2. 日本の「ゆ」について

### (1) 「ゆ」の起源と深層の意味

折口信夫によれば、「ゆ」の起源は古代に遡り、「斎」<sup>ゆ</sup>、即ち、神聖な「禊」<sup>みそぎ</sup>をするために沐浴する川の水（「斎川水」<sup>ゆかわみづ</sup>）の略語である。従って、本来は冷水を指すのであるが、自然に湧いて出た温泉（いづる湯）が最も「神聖な禊ぎの水」であるということになった。また、古代人にとって「禊」<sup>みそぎ</sup>は、「復活」、「誕生」、「環魂」を意味し、その水は「常世国」<sup>とこよのくに</sup>からいで来たものであり、その「ゆ」に沐浴すると「人はすべて始めに戻る」と信じられていた。<sup>5)</sup>

生命の維持に欠くべからざる水は、洋の東西を問わず「神霊の存する場所」である。エリアーデは、水を、「一切の存在可能性の根源」であり、「再生」と「復活」を意味する<sup>6)</sup>ものとしてとらえている。また、ノイマンは、水を、「生命の原初の子宮」であるとし、多くの神話では「深き」「下の」（意識下の）水から生命が誕生する<sup>7)</sup>と述べている。



図2. 湯立神事の儀式（撮影 渡部雄吉氏）

さらに、荻野恕三郎は、古代日本における「本牟和気の水の遊び」の研究で、ケレニーを引用して、水が「万物の始原」であり「一切の子宮であり、母である」ことを指摘している。<sup>8)</sup> また、インモースは、日本に古来から伝わる儀式である「湯立神事」の背後の意味について、水はあらゆる可能性の象徴であり、湯立するための火は、水の可能性に「形」を、つまり「生命に不可欠な暖さ」を与えるものであり、この2つの宇宙力の「聖なる結婚」が、

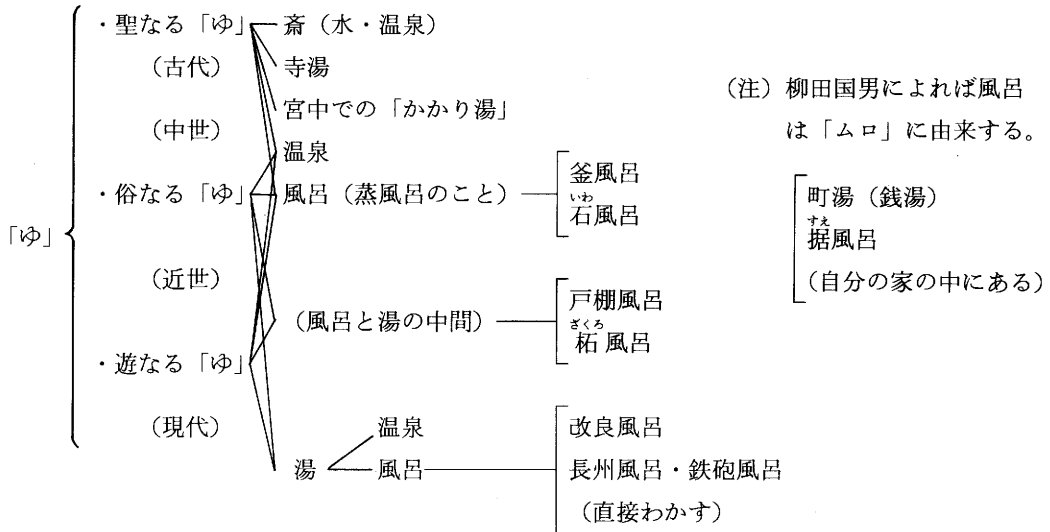
農耕社会の「元型」であり、それがやがて「作物の豊穡」へとつながる、と解釈している。<sup>9)</sup>

かくして、今日の「ゆ」の起源は、古代人の神聖な精神的風土に根ざしていたのであり、——それは「禊の精神」<sup>みそぎ</sup><sup>10)</sup>とでもいいだろう——「再生」、「復活」、「母なる子宮」、「回帰（始めに戻る）」、「可能性の源泉」という意味を担っていたのである。

(2) 日本の「ゆ」の種類

本論文で使用する「ゆ」の概念を、論の展開に沿って整理すると、表1のようになる。

表1. 「ゆ」の種類



3. 「ゆ」と日本人

わが国における「ゆ」の歴史を、担い手の階層に着目しつつ、聖・俗・遊のパースペクティブから考察しよう。

(1) 聖なる「ゆ」

① 古代人と温泉

古代の温泉に関しては推測の域を出ない場合が多いが、狩猟時代の人々が海や川で水浴し、また岩間からわきでた温泉で鳥や獣が傷を浸しているのを真似て試してみたであろうことは、温泉による鳥獣発見の伝説、例えば、伊東温泉のイノシン、鹿教湯のシカ、野沢のクマ、平湯のサル、湯田川のシラサギなどによって明らかである。「万座温泉風土記」の著者は、「天然のこの偉大なる恩恵(温泉)を原始人が放任しておくべき理由がない。……おそらく高度に利用されたものであろう。食物の煮沸や、繊維の軟化はもとより、治療、慰安という方面にも利用されていたであろう」<sup>11)</sup>と

いっている。「野生」の思考構造をもつ日本の古代人にとって、温泉は「聖なる自然の恵み」であり、所有権も支配権もない時代の天然風呂であったし、その利用も自由であったろう。<sup>12)</sup>

② 農耕時代の始まりと信仰としての「ゆ」

農耕が神聖なる労働であった古代農耕社会では、「禊」が、病気・災害・罪悪などの「けがれ」を浄め、はらい、五穀豊穡を祈願するという意味を担っていた。また、この頃の先人たちは、「人智

が未開で自然の霊を信仰していた」ために、高く噴きあがる火山を「御神火」と呼び、わきいでる温泉を「御神湯」と称し、神の力、即ち「靈験」としてこれを崇めた。温泉近くに設けられた「祠」は、湯の神霊をまつるためのものであった。かくして、記紀にも書き残されているような、古代の神判の一方法である「探湯」が発達したのである。<sup>13)</sup>

### ③ 神話、天皇と入湯

「伊予風土記」によれば、景行・仲哀両天皇及び聖徳太子が道後温泉に入湯したとする記録があり、「日本書紀」、「万葉集」、「続日本書紀」には、有馬・伊予・紀伊などの温泉に、欽明・舒明・斎明・天智・天武・持統の諸天皇が入湯たとされている。おそらく、その表向きの目的は「療養」であったであろうが、詳細は不明である。<sup>14), 15)</sup>

また、道後温泉は、その発見・利用が古く、伝説によれば、医療の神といわれる「小彦名命」がこの温泉で病を癒したとされている。

### ④ 仏教の伝来と「施浴」

仏教には、沐浴を説く「仏説温室法浴衆僧經」や「四分律經」があり、「七病を除去し、七福をうる」とされている。奈良時代に国家宗教となった仏教は、大安寺、唐招提寺、法隆寺、東大寺、法華寺等に「大湯屋」や「浴堂」と呼ばれる沐浴場を設け、仏像を安置した。その管理僧を「湯維那」といい、供養の目的で「浴像」もした。

その寺院が、風呂に入れぬ庶民や病人への医療的施しとしての「施浴」を行なった。そのほとんどは蒸風呂である。かくして、神仏習合のこの時代から仏教の「薬師堂」と「ゆ」とのつながりは一層密になった。

施浴は、医療的施しということが本来の意味であるが、寺院側にとってみれば、仏教の普及のための有効な手段たり得たのであり、後には、武田がいうように「故人の位牌を安置し、香華が捧げられるために、無料といっても心ある者は香華に代わるものとして若干の銭を包んで供えて合掌礼拝する」のであるから、収入源のひとつともなったわけである。ここに、聖の裏面としての俗的意味をみることができる。

### ⑤ 修験者と温泉

あたかも山岳信仰によって山地の交通が開けたように、温泉も、宗教的な伝説や信仰と結びついて発達した。<sup>16)</sup>とりわけ、仏教と温泉を最も密接に結びつけたのは「修験者」である。

修験道の基礎になった「密教」では、すべてのものに仏性があると考えられていた。神道は元来、超人間的な威力を神として祀っていたが、そこに大陸の廟の考え方が入ってきて、氏族の祀る神は祖先であるということになり、そこへ仏教が入ってきて、神も人間同様、仏教によって済度されると考えるようになった。9世紀に入ると、神仏習合が始まり、本地垂迹説が興って、ここに修験道が成立することになる。従って、修験道は、神道、仏教、陰陽五行説などが混然一体となっており、修験者の「密教」では、種々の矛盾も統一されてしまっている。

修験者と温泉の関係を「草津温泉誌」からより詳細にみてみよう。

草津には、すでに12世紀には修験者が入っており、古白根山を「霊場」として「修業」していた。彼らは、山の大噴火を「山神の苦惱」とみ、これを救済するために命を投げ出して祈禱をした。「笹塔婆」はそれ故に、噴火口に投げ入れられたが、そこに記されていたのは、「女性の出産」と「血の穢れ」とに関するものであった。7・8世紀頃、山の噴火が女性の出産とみられていたことが記紀

に残っていることを考慮して、「草津温泉誌」の著者は、笹塔波は「日蓮尊者正教血盆教」によって、山神のため、母のため、そして女性一般のために、祈願用として作られた、といている。これらの修験者は、山の中腹にある「富貴原池」で禊をし、「祈禱壇」を設けて修業をし、「白根明神」を祀った。それは、真言修験であり、草津温泉の「湯畑」をのぞむ光泉寺も真言宗の寺である。また、草津の温泉宮も薬師堂の傍に配祀されている。それらは、修験者が、「近くの凹地に湧出する温泉を発見し」、「薬師仏の功德として温泉をみ」、「そこに薬師仏を祀り、次いで温泉明神を配祀し」、温泉に「沐浴してその功德を受けた」ことの証しであろう。「誌」の著者は、さらに、温泉はこうして修験者によって発見され、紹介されただけでなく、その宣伝も彼らによってなされた、と考証している。<sup>17)</sup>

## ⑥ 総括

以上、古代信仰、神話、天皇、仏教、および密教と「ゆ」の関係についてみてきたわけであるが、いずれも、宗教的意味が中心であり、次いで俗としての医療的意味が付与されている。階層的には、信仰厚き古代の農民、記録に残り得えた高い身分の人々、僧侶、そして施浴を受けた庶民が浮かんできた。

しかし、古代人の「ゆ」には、快樂的「遊」の側面が全くなかったのかどうか、また、温泉付近に生活していた農民が、太古より湧き出でるこの恩恵にどれだけ浴していたのか、記録が見あたらない。あるいは、古代人にとっては、聖も俗も遊も混然一体となっていたと解釈できるのかもしれない。

## (2) 聖から俗へ（中世）

聖なるものと「芸能」との関係については、従来から、アジアにおける比較研究<sup>18)</sup>があり、日本に關しては、中世における芸能の成立と展開のなかに、「信仰」から「娯楽」への推移・転換をみる、とするのが通説のようである<sup>19)</sup>が、「ゆ」の場合も、聖なる側面が中心であった古代・上代から中世を経るにつれて、次第に世俗的な側面が現われてくる。この過程を、主として、武田<sup>20)</sup>、落合<sup>21)</sup>、および小暮<sup>22)</sup>に従ってみていこう。

### ① 宮中・公家・武家の「ゆ」

「御湯殿」は、天皇が平常的に沐浴したものであるが、これは、洗場での「かかり湯」式のもの（「ゆ」による行水）であり、女官が奉仕した。しかし、さすがに凶日などもあって毎日とはいかず、神事などのための小浴も多かったようであるが、これは「御湯」の日常化としてとらえることができる。また、平安時代の公家や武家の日記や物語にみられる「御湯殿の儀」は、産湯、皇室の即位、立太子、婚儀、將軍などの官職宣下、新年、あるいは新殿移転などにあたって、吉日を選んで宮中や上流の公卿、武家たちが行なった儀式的沐浴のことであり、ここに「禊」の系譜をみることができる。

これらの階層の人々の当時の日常的な入浴回数は、普通1ヶ月に4～5回、ほかに小浴（行水）を合わせると2～3日おき程度になるという。即ち、寺の蒸気風呂は、上流の公家や武家の「自家湯殿」へと発展し、私有化されていった。

また、平安時代には、温泉や温泉入浴に関する記録が、「枕草子」、「扶桑略記」、「本朝文粹」、「朝野群載」等に残っており、「湯療」が目的であった。「藤原頼長日記」には「湯治」の文字も現われるようになった。温泉も「湯治」という意味で日常化しつつあったとみてよいだろう。室町時代に

至っては、「医談鈔」の中に、「ゆ」に関係のある「上湯、洗足湯、行水場、湯治、水湯、水風呂、湯屋、郷湯、郷風呂、湯行事、湯始、水舟、薬湯、薬風呂、功德湯、湯銭」といった言葉が多くみられるようになるし、湯田温泉の「禁制壁書」に「湯治」の文字が示されてからは、温泉湯治が広く普及してゆく。

また、室町時代には、将軍室である日野富子が毎年末、屋敷に「両親追福」の風呂を催し、下級の公家や縁者を朝から招いて入浴させ、「おとぎ齋」と称して食事を供したことが「実隆公記」に記されているし、「花宮三代記」には、将軍義政が、正月4日の浴後に、酒を奉ったことが記されている。これらは、施浴の系譜をひくものであるが、室町中期には、裕福な公卿、武家の間に「摂待風呂」や「風呂ふるまい」が流行し、浴槽の周囲に山水、滝などをつくり、客を招いて酒宴、遊興の場とした。それは、「ゆ」における「遊」の側面の台頭であり、もてなす側にとってはひとつの「ステータス・シンボル」としての意味をもつものであって、ここに、上流社会における「ゆ」の世俗化現象をみることができる。

## ② 施浴の普及

「吾妻鏡」に記されている頼朝の一日百人、のべ万人の「百日施浴」や、尼将軍政子追善のための「長期施浴」に代表されるように、鎌倉時代には、寺院を始めとするこのような施浴がさかに行なわれるようになる。これは、この時代の寒気に震える庶民の願いに叶ったもので、わが国の入浴愛好の習慣形成にひと役かったといわれている。

寺院による施浴としては、特に、重源や忍性上人によるものが有名であり、これはもちろん聖の領域に属する事実ではあるが、他面において、それが現実的な病人の救済事業としての意味や「寺院、幕府、あるいは僧侶の勸進（仏道を勧めること）によって衆生に功德を施す」という、いわば仏法の普及の意味を担うものでもあり、ここに「ゆ」の手段化、「ゆ」による権力と宗教の結びつきをみることができる。

## ③ 戦国の「かくし湯」

「八瀬やっせの釜風呂」の伝説には、古く白鳳時代、壬申の乱（672年）の時、大海人皇子が背に敵の矢を受け、その治療のために暫く釜風呂を利用したとある。

室土・桃山時代は戦国の世であり、各地の温泉で戦傷者の治療のため、温泉が盛んに利用されている。武田信玄の「かくし湯」によって代表されるこの「ゆ」の利用は、外科的治療としての意味をもつと同時に、「ゆ」と軍事制度との結びつきを示すものとして、世俗化現象の一要素を成す。

## ④ 寺湯から町湯へ

施浴の普及によって「風呂供養」の考え方が発展するに伴い、庶民の温浴意識も広まり、入浴に対する欲求は、次第に「町湯」の発達を促した。町湯（湯屋、風呂屋）がいつごろできたかは定かではないが、1403年、足利義教の将軍宣下を賀して来朝した李朝特使の帰国後の報告書の中に、「日本人は大人も子供も沐浴潔身を好み、大家には湯殿があり、町中には銭湯があつて、沸けば角笛を鳴らしてこれを告げ、人々は湯銭を払って入浴する」（傍点筆者）と述べていることから、この時期にすでに、江戸時代に花開いた町湯が出現していたことがわかる。ここに、「ゆ」の経済的意味、即ち、交換価値としての「ゆ」の制度化の始まりをみることができる。江戸時代も1715年の洛中洛外の湯屋と風呂屋の軒数は、「京都御役所向大概覚書」によれば、総数148軒となっている。これはまさに、「ゆ」の聖から俗への移行・変質の典型である。

さらに、「太平記」、1360年頃の記録に、「湯屋風呂の女童」とあるのをみると、すでに南北朝の時代から、「ゆ」と「湯女」との関係がみられたことがわかる。(湯女については後述する。)

### ⑤ 絵巻物と庶民の「ゆ」

絵巻物は、上代・中世の風俗・生活を知るうえで貴重な資料であり、特に、人間生活のありのままの姿をテーマにしているだけに、多くの階層の人物が描かれている。例えば、筑紫の禅寺の風呂風景、通行人たちが荷物を路傍においたまま、取り湯の湯槽にのんびりと浸っている施浴のあり様、ウサギとサルが水浴に遊ぶ様、そして「洛中洛外図」がある。

「洛中洛外図」は、京都内外の朝廷、幕府、社寺、邸宅、商店、それに庶民が多数雑踏する繁栄ぶりの全貌を大観的にとらえたものであり、「ゆ」に関するものとしては、風呂屋や行水の風景、四条河原のみそぎや洗濯（ふみ洗い、たらい洗い）の様子などが描かれてある。

それらは全て、「ゆ」の大衆化の始まりを示している。

### ⑥ 温泉と農民

この時期の各地方には、海岸の適当な岩窟を利用した「石風呂」がすでに瀬戸内海沿岸に発達しており、海藻類を用いたことから塩風呂とか藻風呂と呼ばれていたが、これは、季節的（例えば、村の神事）に催されることが多く、「潔斎浴」および「保健上」の意味をもつものであった。しかし、やがてこうした風呂は、「弘法大師説がからみ、信仰と相まって、農閑期の農民をはじめとする多くの庶民を惹きつけた。」<sup>29</sup>ここに、村人と石風呂、農民と石風呂、即ち、日本の底辺を支えた庶民と「ゆ」との関連をみることができる。

これを、中世に限ってより詳細に検討しよう。

神崎宣武は、平安時代の有馬温泉の例をあげ、農民が、温泉が近くにある場合は通年的に、また、遠くの温泉場に行こうとすれば冬場、つまり農閑期に、骨休めと称して「保養」と「娯楽」を目的とした湯治を行ない、半年なり1年なりの働かぬエネルギーを蓄えた<sup>24</sup>と言っているが、いまひとつ史実が判然としない。草津温泉の場合はどうだろうか。

萩原進は、「土地の者および周辺の住民は早くからこの天然の温泉を利用してははずである」<sup>25</sup>と言っているが、この「土地の者」の階層はといえば、「兵農一体の土豪」としての湯本氏とその領民であった。温泉場が光泉寺付近に薬師堂をもち、一応の形態を整えていた当時、この湯本氏が「百姓」に課した租税としては、湯税が主たるものであった<sup>26</sup>が、その他にも、米、麻、綿、そば等々が年貢として課せられており、生産性が乏しいこの高地でさえ、人々が農業を営んでいたことを示している。それは、「冬住み」、即ち、寒く雪の多い冬の間、生活の本拠を一端、少しでも暖い山麓の開けたところに移住するという二次的、二重生活を行なうことによって、温泉業と農業との両立を可能とする生活慣習によるものである。<sup>27</sup>これら半農民が自分たちの温泉を利用しなかったはずはないから、温泉経営と田畑での作業とのつかの間に、草津の湯が、一日の疲れを癒す最良の手段となったであろうことはまちがいない。

### ⑦ 総括

かくして、中世における日本の「ゆ」は、聖なる部分を多く残しつつも、上流階級（皇室、公家、武家）における日常化、私有化、湯治の普及・手段化、および、施浴の庶民への普及（大衆化）、町湯の成立（交換価値化）、といった過程を通じて、俗なる部分を顕在化させ、世俗化していった。

また、その意味は、「保健衛生」的、「医療」的側面を中心としていったものの、後には、プライドや権力との結びつきを見せ、遊なる部分をも表面化させるに至った。

### (3) 俗・遊としての「ゆ」

「温泉の大風呂こそが日頃のしがらみを全部捨てきって、思う存分手足がのばせる所なのだ」とは、「江戸の風呂」の著者、今野信雄の見解であるが、日本の「ゆ」の世俗化の典型を、江戸の「銭湯」に見い出すことができる。換言すれば、わが国における「風呂」文化は、江戸の「銭湯」の成立をもって、ひとつの社会的制度としての確立を見ることができる。

#### ① 江戸の風呂

江戸は、武家地、寺社地、町人地の三住区が総合された、世界一人口の多い大消費都市であり、富裕な商人が輩出して日本独自の町人文化を生んだが、湯屋・風呂屋営業の普及は、そうした都市化の反映である。

家康が江戸入りした当時は、どこもかしこも「汐入の草原」であって、民家はわずかに百軒あるかなしという状況であったために、家康は、上水、橋梁、埋め立て、江戸城の整備、町家等々の土木建築を急いだ。そのために、労働力はいくらあっても足りず、江戸はもとより全国から出稼ぎの庶民が集まった。江戸の夏はむし暑い。汗水流す重労働には、風呂こそが「命の洗濯」になった。

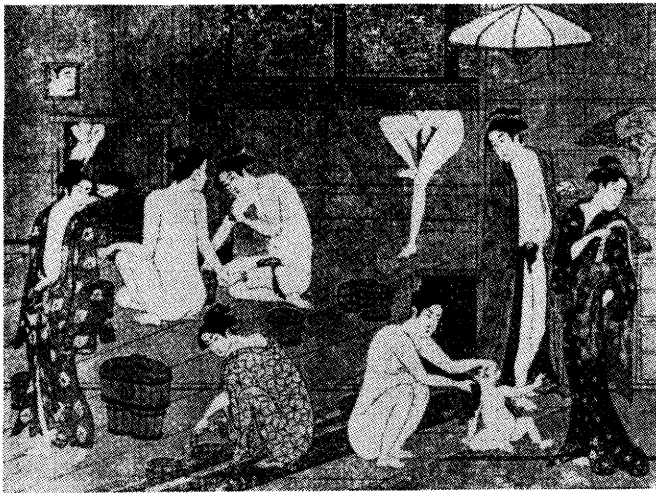


図3. ざくろ風呂（講座日本風俗史 第六巻，p235所収）

江戸に最初にできた「銭湯」は、伊勢の商人、与一の経営する銭瓶橋の蒸風呂であった。風呂の形態については、従来の蒸風呂に、湯も加え、蒸気をのがさないために戸棚によって風呂室内を密封した「戸棚風呂」が一時的に流行した。こうした風呂が生まれた理由は、燃料不足と水不足による。これが後に「柘榴風呂」へと変化していった。これは、戸棚風呂と同じ、蒸風呂と今日の銭湯との中間で、洗場をもつが、低い鴨居の下からかがんで入る、つまり、かがみ入る（鏡鑄る）で、鏡磨きにざくろの実の汁を用いたところから

くるシャレである。

武田によれば、「江戸の居住者の中で、自宅に湯殿を持つものは高禄の武士と老舗・大家ぐらいで、下級武士と一般庶民の各階級は、皆それぞれ町々の銭湯に赴いた。……それで銭湯は、各種の老若男女の集まりとなり、人が集まれば自ら話題は多く、日常生活のこと、近隣から町内の噂話、時には幕政の善悪の評にも及び、これを語る人も聞く人も共に誰憚ることなく、皆真裸で、湯槽にも上下の別なく、自ら平等で、いわば江戸時代を通じて最も民主的な場所であった。」<sup>28)</sup>常連も現わ



れ、湯屋の二階で茶を飲み、将棋をさした。

1808年にはすでに「湯屋十組仲間」という組織をつくり、その傘下には、男風呂141株、女風呂11株、男女両風呂371株、合計523株が存在していた。

こうした江戸の風呂風景は、「浮世風呂」(式亭三馬)や「江戸繁昌記」(寺内静軒)に詳しい。今、そこに出現する階層を列記するなら、小商売の店をかまえる者、近くの旅籠に泊りつつける旅人や芸人、下級武士や坊主、場末の芸者、料理屋づとめの女たち、そのほか常磐津の師匠とかお囲い者、茶屋女。以上が朝風呂で、それがのんびりした午後も二時をまわると、寺子屋帰りの腕白小僧たちとなる。ようやく夕方になると、仕事を終わって一日の疲れをとるあらゆる階層の庶民たちで、湯屋は喧騒をきわめる。安い料金で入れる風呂は、まさに庶民のいこいの場となった。ここに都市における「ゆ」の大衆化、民主化をみることができる。

江戸の風呂をめぐる文学は、「いかに生きるべきか」というよりも、「いかに楽しむか」という、生の「遊」側面の文化であった。

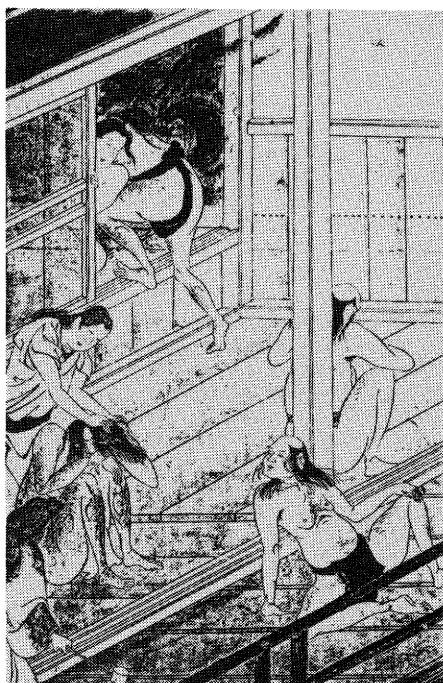


図4. 戸棚風呂と湯女(「近世風俗図譜」  
6, 遊里, p40-41所収)

また、折口は、江戸の山の手の文化を、「貴族的」、「野暮・かうと」と、下町の文化を、「平民的」、「粹・意気」と見ているが、<sup>29</sup>「遊里」を中心として成立した美意識としての「通」が、「なにごとによらず通曉して、その風俗・行動・生活態度すべてよろしきかなうこと」<sup>30</sup>であったのと同様、江戸の風呂には、例えば、経営者の「湯語教」とか、入浴者の「心得」とかが示すような、風呂特有のいましめやしきたり、「通」がる客の「粹」なしぐさや慣習が形成され、風呂敷、浴衣、小桶などの様々な湯の道具も考案されていった。<sup>31</sup>

また、江戸時代には「薬湯」が登場するし、各地の湯花をとりよせた再生温泉も流行したが、これは通常の入浴料金よりもいく分高価であった。

年中行事としての入浴には、「菖蒲湯」、「桃湯」、「柚湯」があり、12月すすはらいのあとの「煤湯」、大晦日の「年の湯」などがあった。

さらに付記すべきは、「湯女」の存在である。「貴客」(「通」がる客)は、湯女の待つ「二階」に上がった。<sup>32</sup>湯女は、前述の聖僧「湯維那」をもじったもので、今日でいうホステス業にあたるが、時にはいかが

わしい風紀を漂わせた。やがて、町奉行の禁止令を受け、その役を「三助」にゆずることになる。しかし、湯女は、禁制の網の目をくぐって存在し続けた。「ゆ」と「湯女」の結びつきは、古代オリエントから現代まで世界共通の事柄である。<sup>33</sup>

## ② 温泉の隆盛

前述の中世において、京都在住の公家階級による温泉行は、日数や交通の便を考慮すると、病気

の治療とか病後の静養のための湯治が主であったといつてよいが、中には、湯治にかこつけて「遊山気分」のものもすでにあった。

江戸時代、参勤交代の制によって各地の交通が整備されてくると、温泉行は増々盛んになる。すでに諸大名は、領内の温泉地を領民の休養・湯治場として保護していたが、この期になると、「物見遊山」としての意味をもった湯治も増加してくる。

また、わが国の湯治は、古くから一種の民間療法として行なわれていたが、江戸期に入ると、洋学者宇田川榕菴<sup>34</sup>などによって、温泉の自然科学的分析が始まる。

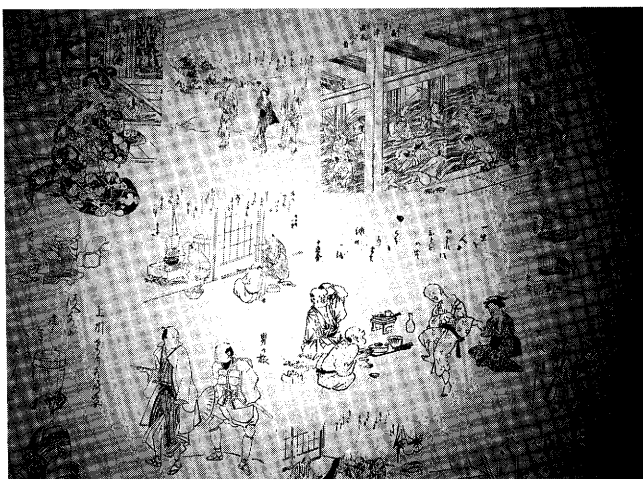


図5. 湯治階層（江戸・草津）（草津町温泉資料館所収）

温泉への入浴階層については、「伊香保紀行」に、「土農工商ともに病ありて温泉に浴する事二廻り（14日）三廻りの間は其業をやめ、世事の繁多なるをわすれ、山中の風景を弄し、心静になり侍れは、をのつから心気を養い血氣流行して病を治する者おほし」（傍点筆者）<sup>35</sup>とあるが、落合によれば、「江戸時代までの温泉場では、身分によって入湯を区別し、一般人が入浴する入込み湯、雑湯、総湯にたいして、とめ湯、かぎ湯、御殿湯、殿様湯のように、藩主、幕吏、代官などの入浴にはかぎをかけ、他の入浴を禁じていた」<sup>36</sup>

ようである。（図5）

そこで、箱根の温泉を例にとり、主として農民を中心に、湯治と階層の関係をより詳細に探ってみよう。

### ③ 湯治と階層 —— 箱根七湯を中心に ——

岩崎宗純の「箱根七湯」によれば、<sup>37</sup>箱根にはすでに室町時代から、熊野社に参詣する道者が入っており、七湯の一つである芦ノ湯は、こうした信仰の地方的広がりの中で、温泉のある宿坊として利用されていたらしい。また、戦国時代には、底倉湯近辺の土豪たちが「百姓」の家を湯屋とし、薪、炭、酒などを申しつけた、という記録がある。この底倉には、秀吉も陣中の労を癒すために来湯しているし、戦火のおさまった底倉村では、百姓たちによって村が再建され、再び湯宿商売も行なわれるようになった。江戸期の草津温泉周辺の絵地図（六合村 市川義夫氏蔵）には、はっきりと黄色にぬられた「畑」地が示されており、また、「冬住み」の小雨村、生須村あたりの農民・温泉関係者の生活ぶりについて、「村の娘たちはあやめの咲く頃から、草津へ女中に出て行き、村にのこった若者は駕籠をかつぎ、馬を引いた。老人や子供たちは湯治人の食べる山菜をとり、蚕の世話などをするのが、このあたりの村々での生活であった」（傍点筆者）<sup>38</sup>とある。これらは、温泉宿で働く側の階層であるが、彼らが自分たちの温泉に浴さないはずはない。

「永代日記」には、当時の箱根湯本には、大名の奥方・家来、小田原藩士、江戸町人はもとより、「百姓」、「下僕」など様々な階層が湯治していたことが記されている。ただ、遠方から湯治にやってくる場合には、大名や武士はさておき、長期湯治が習俗となっていた当時の入湯、宿泊、食事等の経費、および旅にかかる費用を考慮すると、江戸初期の一般の町人や百姓たちがそう気軽に来られるわけはなかった。

しかしながら、化政期にもなると、各種の信仰形態を母胎とする「講集団」が、集団湯治をするようになる。これらの講集団を形成するのは、江戸の町人であり、関東一円の百姓であった。村内で各種の講中に属した百姓たちは、「ついで湯めぐり」と洒落こむことも多く、本来の目的は表向きで、内実は「色気」と「食い気」の享楽的要素を強くもっていたことが「伊勢参宮道中日記」（「参宮道中ものがたり」）に如実に示されている。

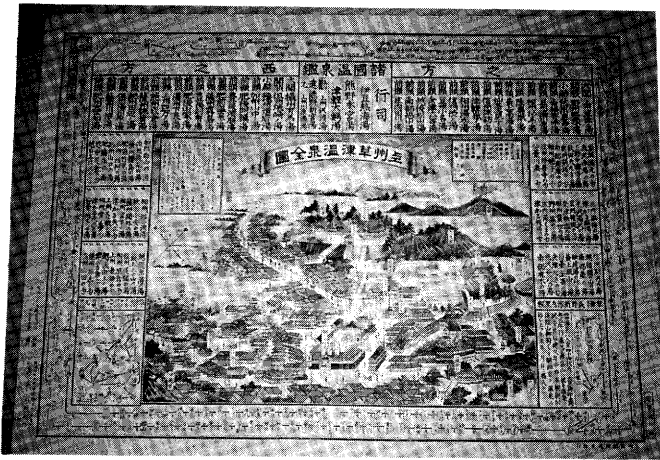


図6. 江戸期の温泉番付（草津町温泉資料館所収）

が発刊されているが、それによれば、東の大関が「上州草津ノ湯」で西の大関が「攝州有馬ノ湯」となっている。そこに名があげられているおよそ90の他の温泉場も、多かれ少なかれ、箱根と同様な過程を辿ったであろう。

板坂耀子は、「江戸温泉紀行」を解説する中で、当時の温泉における「遊」の内容について、① 別天地への転換、② 心をゆったりと持って楽しく遊ぶ、③ 様々な人々との気やすい交流、④ 見知らぬ者同志、酒をくみかわして遊び戯れる、⑤ 各地の話の収集、⑥ 帰りを待つ家族への土産品の物色、等々をあげている。<sup>39)</sup>

ここに、江戸時代における温泉の大衆化と遊興化をみることができる。

#### ④ 温泉場の資本主義化——草津温泉を事例に——

温泉のこうした大衆化・遊興化は、同時に資本主義化の過程でもある。そこで、草津温泉を例にとり、萩原に従ってそれをみてみよう。

こうした庶民の集団的な旅から生まれたのが「一夜湯治」である。今日の日本人の団体旅行の先がけともいえるこの一夜湯治は、一泊二日の短期滞在であるから、当然、本来の医療湯治の意味をほとんどなくしているといつてよい。しかし、この一夜湯治は、箱根の七湯を繁盛させ、「箱根細工」と呼ばれる土産品を有名にした。おそらく、鳴子温泉の「こけし」も、そうした背景をもつものと考えられる。文化・文政期の江戸には、当時の相撲の番付の形式をかりて、各地の温泉の番付表（図6）

萩原によれば、草津の温泉は、表2のように4つの時期にその社会経済史を分けることができる。<sup>40)</sup>これを見ると、温泉と経済との結びつきはすでに「集団共有時代」に見られるものの、「ゆ」の観念そのものが資本と結びつくのは、やはり江戸期以後である。

表2. 湯の所有権と入浴施設にみる草津温泉の資本主義化

	社会経済・湯の所有権・入浴施設
原始共産制時代	所有権も支配権もない天然風呂時代。自由入浴時代。宿泊所なし。
集団共有時代	部落とか、その温泉の近くに集った特定の組合社会によって湯が共有される共同風呂時代。小規模宿泊併設期。（自炊式浴場の発生）
第一次私有時代 （江戸初期～）	湯と宿舎が分離し、宿泊は宿屋、入浴は共同浴場という時代。また、共同湯が少なくなり、旅舎に内湯として引湯する時代。湯の私有化の始まり。集団宿泊所施設期。
第二次私有時代	資本家による湯の権利の独占。内湯を引き、建築・設備共に近代化し、入浴者には科学的知識を与え、療養と休養と文化的教養とを総合し、近代的な経営がなされる総合経営期。

また表3は、江戸中期の明和8年（1771年）から大正12年（1923年）の約150年間における草津全体の浴客数と湯本平兵衛という領主個人のそれを、湯銭から逆算した統計表である。備考には、浴客数に影響していると考えられる気象や社会的な出来事が記されている。これを見ても、草津の場合には、自然の条件によって、浴客数にある程度の変動があることがわかる。しかし、江戸中期にすでに約一万人の浴客数を集めていること、およびその数が、大概において一定であることを考慮すると、草津温泉の資本主義化は、すでにこの「平成」期に始まっていたとみてよいだろう。

大正も10年をすぎると、西欧化の波を受け、その数は17万人を超えるようになるが、この時期にはすでに、近代的な旅館が増加している。

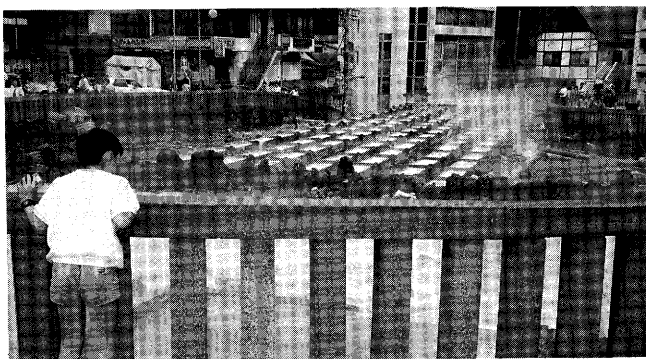


図7. 現在の草津、湯畑

さしずめ現在は、第二次私有時代でも特に、「遊」局面が強調されている時代といえようか。（図7）

温泉医学を提唱する人々の中には、「温泉は療養の場より、遊興の場、酩酊と疲労の場と化した」<sup>41)</sup>とする批判的見解もある。

ともあれ、草津の資本主義化は、江戸時代の「ゆ」の私有観念の発達と共に進んだといってよい。

表3. 草津温泉の浴客数の変化（「草津温泉史」, pp. 178-181所収）

年代	延人数	湯平同左	備考	年代	延人数	湯平同左	備考
明和8	-	280	全国大旱魃, 江戸大風雨	文政10	13,155	755	
安永元	10,311	361	関東奥羽冷夏, 関東大風雨洪水	同 11	11,350	561	東國洪水
同 2	10,405	504		同 12	10,758	478	吾妻郡大水
同 3	13,259	551	江戸大風雨洪水	同 13	13,282	782	天保元年なり
同 4	12,415	502	信濃洪水	天保 2	11,494	638	
同 5	8,005	304	麻疹流行, 日光社参, 感冒流行	同 3	11,484	721	
同 6	11,724	486		同 4	10,920	709	寒冷, 洪水
同 7	13,222	603		同 5	3,766	221	関東大風, 旱天, 凶年
同 8	12,226	594	東海道関東大風雨洪水	同 6	11,193	776	上野大風雨, 洪水
同 9	11,128	583	関東大雨洪水	同 7	7,016	443	関東奥羽寒冷, 大飢饉
天明元	11,881	530		同 8	1,274	118	中部関東大風雨洪水, 大飢饉
同 2	11,986	505	信濃洪水	同 9	8,062	576	
同 3	6,430	261	浅間山大噴火(7.8) 凶年	同 10	9,472	855	
同 4	3,779	162	大凶年	同 11	10,404	806	関東信越風雨
同 5	8,856	383	諸國大旱魃	同 12	13,408	1,111	
同 6	7,967	219	関東大雨洪水再三あり	同 13	12,288	1,063	
同 7	3,525	117	奥羽霧雨, 飢饉, 冷夏	同 14	13,327	1,118	関東大風雨洪水
同 8	9,771	416		同 15	12,545	941	弘化元年なり, 関東風雨
寛政元	11,226	472	諸國大雨洪水	弘化 2	11,405	952	
同 2	11,000	531		同 3	10,499	1,036	
同 3	11,684	425	信濃関東大雨洪水	同 4	9,573	1,028	
同 4	11,907	437		嘉永元	12,923	不詳	
同 5	11,400	453		同 2	12,828	"	
同 6	11,979	510	関東霖雨, 諸國冷氣	同 3	11,356	"	
同 7	11,398	541		同 4	9,610	"	諸國洪水
同 8	12,400	422		同 5	11,108	"	関東大風雨洪水
同 9	13,761	519		同 6	9,474	"	江戸近國大風
同 10	10,985	416		同 7	10,924	"	安政元年なり, 信濃洪水
同 11	11,099	480		安政 2	19,044	"	
同 12	11,044	519		同 3	11,146	"	信濃関東奥羽洪水
享和元	9,551	433		同 4	12,024	"	奥羽寒冷, 信濃大風雨
同 2	8,378	303	近畿東海道関東洪水	同 5	7,657	"	
同 3	11,805	716		同 6	8,702	8,702	上野洪水
文化 4	12,446	694		万延元	7,493	7,493	奥羽関東中部大風雨洪水
同 5	12,660	778	霖雨洪水	文久元	9,307	1,105	
同 6	9,330	475	関東大風雨洪水	同 2	9,343	892	麻疹大流行し惨状呈す
同 7	9,526	496		同 3	16,051	1,156	上野洪水
同 8	9,309	456		元治元	12,376	1,517	
同 9	8,872	427	江戸奥羽洪水	慶応元	11,390	1,388	
同 10	9,982	634		同 2	4,082	不詳	国内騒がし
同 11	9,983	598		同 3	4,627	718	以上湯本平兵衛調査, 同上
同 12	10,156	531	東海道信濃大雨	明治44	5,572	-	
同 13	10,719	587	関東奥羽大雨	大正元	5,725	-	
同 14	9,952	512	諸國寒冷	同 2	5,642	-	
文政元	9,245	464	江戸近國寒冷	同 3	5,933	-	
同 2	10,513	555		同 4	5,797	-	
同 3	9,770	596		同 5	6,318	-	
同 4	10,145	433	関東奥羽旱魃	同 6	8,362	-	
同 5	10,335	611		同 7	8,362	-	
同 6	10,524	603	関東洪水	同 8	9,674	-	
同 7	9,649	512	関東等洪水	同 9	9,972	-	
同 8	10,398	502	凶年, 霖雨	同 10	176,693	-	
同 9	10,372	615		同 11	185,788	-	
				同 12	168,367	-	以上吾妻郡誌

## ⑤ 近代における「ゆ」の大衆化、西歐化

## 〈銭湯〉

日本人の「あつ湯好き」に関しては、蒸風呂に慣れたせいだとか、戸外での筋肉労働の結果であるとか、「意地っ張り」のためであるとか、あるいはまた、水をさして人に迷惑をかけないという「高級な市民意識」によるとするもの等々、いろいろであるが、<sup>40</sup>衛生上の理由はなかったのであろうか。

ともあれ、この熱き銭湯は、明治初年の東京には、慶応年間以前の3倍にも及んだといわれている。当時、湯釜や湯槽が改良され、ざくろ口をとり、屋上に湯気ぬきを設け、湯槽を流し場の板と平坦にし、洗い場を広くした「改良風呂」が浴客から喜ばれた。後には、湯槽のふちを少し高くして洗い場の汚水が入らぬように工夫され、やがて東京市内に広がった。明治41年、東京の湯屋数は、市内879軒、郡部338軒であった。

また、阪神地区周辺には、遊園地に娯楽をかねた特殊公衆浴場が付設された。明治末の堺市大浜の塩湯、大阪天王寺のラジウム温泉、武庫川沿いの宝塚温泉などは、こうした今日の「ヘルスセンター」のはしりといってよい。

昭和4年3月現在、浴場組合員数は、東京市965（ほかに隣接都市1452）、横浜451、名古屋465、京都375、大阪1081、神戸305となっている。<sup>41</sup>

## 〈温泉〉

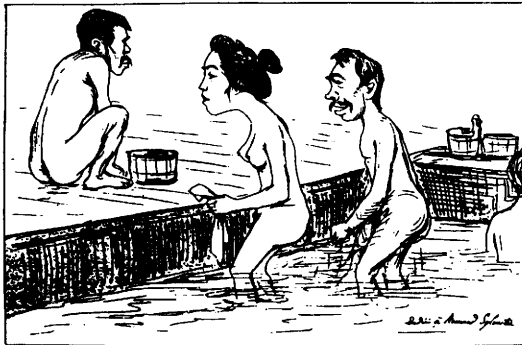


図8. 明治の混浴（「絵で書いた日本人論、  
ジョルジュ・ピゴーの世界」、p101所収）

日本人が世界でも特に温泉を愛好する民族であることは、明治期に來日したウェンストン<sup>42</sup>、モース<sup>43</sup>、チェンバレン<sup>45</sup>らの記述に詳しいが、とりわけ、「混浴」の風習には、「恥を重んずる国民なのに」と外国人を驚かしたようである。（図8）

「気の合った者たち4・5人で、布団から米・味噌まで持って1・2週間、食事は粗末だが、歌ったり踊ったり、また、湯治見舞と称して、近親からもらったさし入れを同室の者にふるまったりして、結構楽しい庶民の湯治」（宮本常一編著、「日本の宿」から）

も、明治から大正、そして昭和も30年代までは方々でみられた。因みに、明治24年頃の宮城県鳴子温泉では、湯治に必要な経費は、「小牛田から鳴子までの人力車賃は70銭、馬車賃は53銭、自炊の木賃代は坐席、器具、入浴料共で1日上等が10銭、下等が7銭、蒲団一組の賃代は3銭5厘、菜種油1夜1銭5厘、石油二分心1夜2銭、白米1升8銭内外<sup>46</sup>であった。また、物見遊山の系譜をひく「温泉湯を宿とする山旅」は、時代と共に増加の傾向を示すが、その醍醐味は、田部重治の「わが山旅五十年」<sup>47</sup>に詳しい。

しかし一方では、先に江戸時代に現われた遊興化と温泉施設の西歐化がさらに進んだ。

関東一円からの湯治客でにぎわった箱根の七湯も、明治初年から、洋風の旅館がつぎつぎと建てられ、電気鉄道の開始と共に変貌し、西歐化していった。<sup>48</sup>温泉場は、このように、明治も中期をすぎるところから道路や交通機関の発達によって次第に変容してくる。それに伴い、多くの温泉地におい

て遠来の客はその歓楽の街へ、一夜の享楽を求めて集まり、そのために、「一泊二食宴会型団体旅行」に都合の良い旅館やホテルが生きのびるようになった。こうした傾向に対し、最近では、「温泉医学」の立場からの批判や静かな社会運動がみられる。<sup>49)</sup>

### ⑥ 家庭用風呂の普及

ローレンス・ライトによれば、西欧の「バス・ルーム」は、1900年をすぎてほどなく、小型化、標準化、大量生産化することによって大衆化した。<sup>50)</sup>

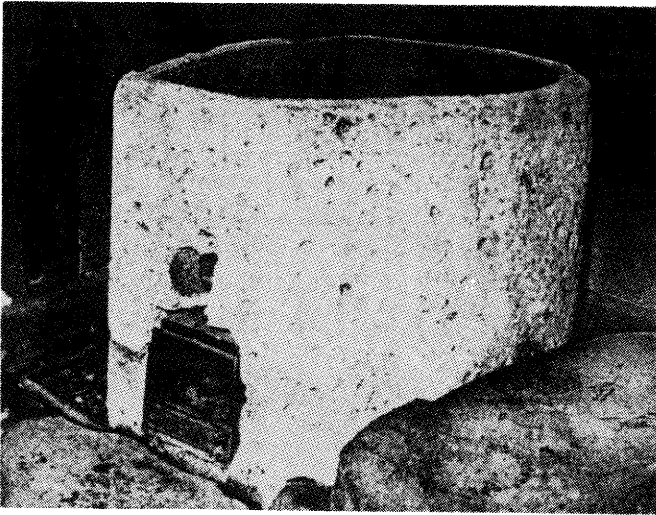


図9. 会津の石風呂（『日本民俗文化大系14, 技術と民俗（下）』, p348所収）

日本の「ゆ」についてもこれと同様、家庭に、旧来の「据風呂」である湯槽と洗い場のついた「風呂場」が取り付けられるようになってから、一般大衆へと普及していった。通常は、風呂桶であったが、場所によっては釜風呂や石風呂（図9）に入った。会津では昭和30年代まで石風呂を使用する家が多かった。<sup>51)</sup>

「子供たちを風呂に入れてやり、いっしょに湯の中でさわぐのが無上の楽しみだという中年男も、私の知り合いの中にいる。……手拭を四つにたたんで額にのせ、虎造のひとふしをうなる。

『ああ、いい湯だな』……』とは

多田道太郎の言であるが、それは、家族成員の帰属意識を何らかの仕方で助長しているにちがいない。<sup>52)</sup>湯上がりの「爽快感」は古今東西の万人に共通する湯の醍醐味のひとつであるが、生理学的には、皮膚に付着している汗、脂肪、ほこり、雑菌などの不潔物が洗い流されたことによる<sup>53)</sup>らしい。古代、俗を洗い流した「禊」の「ゆ」は、自家風呂の普及によって大衆化した。逆に、銭湯の需要は減少し、現在では、持家や風呂場をもたない人々や常連の客のみとなりつつあり、例えば、水戸市内のいわゆる「銭湯」は、現在、たった2軒だけである。

それに伴い他方では、西欧流の温泉形態を導入した「クアハウス」が近年流行してきており、昭和62年現在では、全国に20ヶ所あまりつくられている。クアハウスの設備には、例えば、かぶり湯、裸浴、水着着用浴、気泡浴、圧注浴、渦流浴、寝湯、箱蒸し、サウナ、ドゴール浴、噴出浴、冷水浴、露天風呂、檜風呂、葉草風呂、歩行浴、運動浴、飲泉等の他に、リラックス・レストコーナー、トレーニングルーム、プール、アスレチックコース、テニスコート、キャンプ場、スキー場、遊歩道、そして、食堂、喫茶店等々があり、「アメニティー」の追及とPRに余念がない。

昭和62年6月9日、国の制度としての「総合保養地域整備法」（いわゆる「リゾート法」）が公布・施行された。それに伴って、わが国の「ゆ」も、自然、人間、そして経済といった諸価値をめぐって多くの論議を呼んでいる。多くの「スパ・リゾート」もその例外ではない。

⑦ 総括

以上、聖なる「ゆ」から俗や遊としての「ゆ」への変質をみてきたわけであるが、その過程は、「ゆ」の資本主義化の過程であり、階層の下降現象でもあったといっていよう。

図10は、P.ブルデューの社会的位置空間および生活様式空間の図<sup>54)</sup>を参考に、「ゆ」文化の意味の歴史の変遷を、担い手の階層との関連で示したものである。

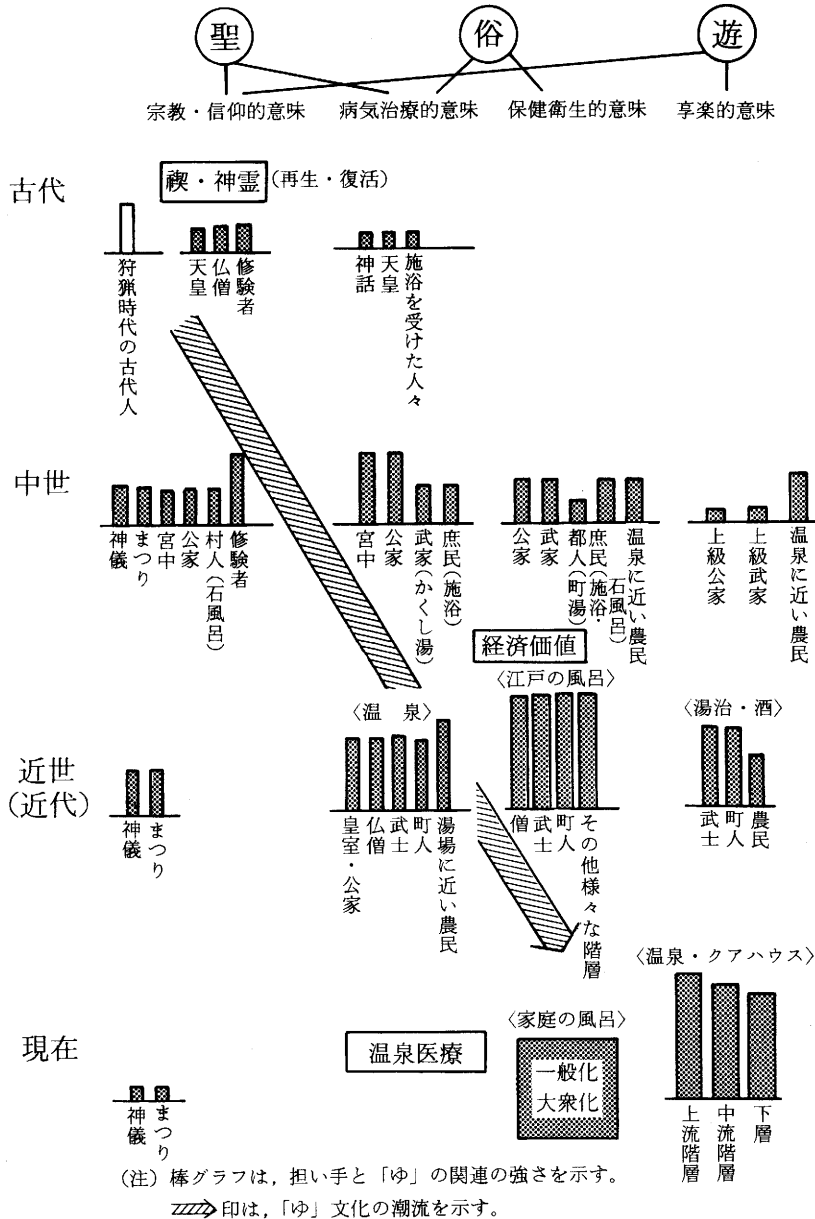


図10. わが国における「ゆ」文化の世俗化過程と階層下降現象



(4) 古くて新しい「ゆ」の再生的意味

かくして、日本の「ゆ」文化の歴史に一貫して存在したものは、その「再生」という意味ではなかったか。また、「ゆ」につかった時の独特の醍醐味も——たてまえと本音のちがいを超えて——常に不変ではなかったろうか。

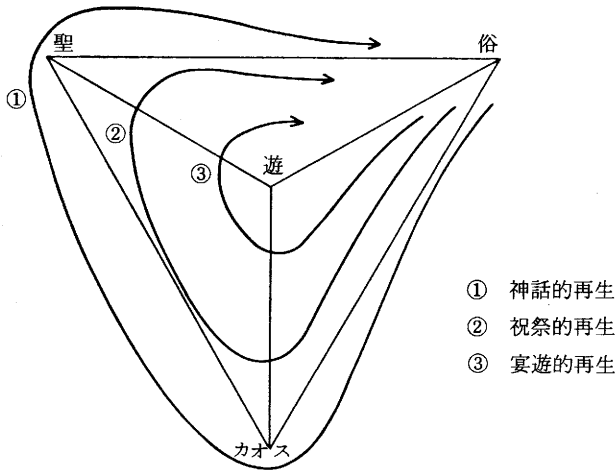


図11. 世界再生の方法（「価値意識の社会学的研究」, p31所収）

木村洋二は、聖・俗・遊・カオスの4極構造モデルから、「世界再生」の方法として、① 神話的再生、② 祝祭的再生、③ 宴遊的再生の3つをあげている(図11)が<sup>55)</sup>、それらの再生は、本研究の「ゆ」による再生にも共通に認められる事実である。しかしながら、その本質の意味がどこか異なっている。

民俗学では、遊びの意味を折口の「鎮魂たまふり」に見い出しており、「魂乞ひ、魂ふり」(西角井)、「魂をゆすぶる」(和歌森)、「魂をゆさぶり動かす」(樋口)とも表現され

ている。それは、生の根源をゆさぶる宇宙のリズムの象徴的表現であり、生命力の弱まった不安定なるものの生命力を強めて、その生命を安定化し、健全化したり、死せるものを生かしめんとする、つまり、不安定→安定、カオス→コスモス、生命の衰弱→強化、死→生といった動きを促そうとするもの<sup>56), 57)</sup>である。

「水」は一切の根源であり、女性の子宮であった。それは、天より降り、地にもぐり、天に昇る。宇宙のリズムを自らに体し、強く、たくましく、健やかに「再生」を促す。

河合隼雄によれば、日本は母性社会であり、母性原理としての「包含する」機能にその特性を示す。<sup>58)</sup>ノイマンは、その著「意識の起源史」において、意識が生まれてから十分に発達し、ついには再び無意識と再結合を果たして「個性化」を遂げるとしているが、林道義は、中世以後のヨーロッパの発達は、男性性を極度に一面化し、固定化・化石化させていく方向であり、女性性との間に結合や調和の関係をもつ可能性を閉ざしていくものであって、個性化への道とはほど遠い<sup>59)</sup>といっている。

「ゆ」は、受動的に「成る」文化であり、「水」による再生であった。それは、無意識への回帰であり、それへの結合である。古代の「ゆ」による「聖なる禊」の意味は、ここにあったものと考えられる。日本人は、「ゆ」によって「身も心も洗い」、「原点」にもどってきた。それは、意識の深層に失った自己への出合いであり、失われた自己の回復、自己分裂に対する復讐である。ユングの言葉をかりるなら、「ゆ」は、肉体の生命を内側からとらえた魂と、魂の生命が外界に顕現された肉体との結合であり、現代の意識段階を無意識によって克服しようとする「若返り」の試みである。<sup>60)</sup>

現代の俗なる「ゆ」が、古代と同じ聖の意味をとりもどすことはないであろうし、また、フィン

クのように、遊びが、水辺にうつる影のように「世界の象徴」にすぎないものである<sup>9)</sup>とすれば、求めるべき新しい「遊」なる「ゆ」は、限りなく「空」や「無」に近づく、ということとはできないだろうか。

温泉も風呂もそれ自体はただの物質にすぎない。しかし、日本人はこれに様々な意味を付与してきた。「ゆ」の意味はまさに、日本人の人間としてのあり方の象徴であったとってよいだろう。

### （注）

本研究における草津温泉に関する資料は、現在、六合村小<sup>く</sup>雨<sup>に</sup>の民宿であって、かつて「冬住み」の家であった大黒屋の主人、市川義夫氏の御指導と御協力によるものである。ここに記して、感謝の意としたい。

### 引用・参考文献

- 1) 和辻哲郎, 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 昭和48年, pp.134-138.
- 2) 日下裕弘, 「日本のスポーツ制度」, 菅原禮編, スポーツ社会学への招待, 不昧堂出版, 平成2年, pp.101-135.
- 3) 井上俊, 遊びの社会学, 世界思想社, 1988年, pp.150-151.
- 4) 多田道太郎, 遊びと日本人, 筑摩書房, 1976年, pp.77-86.
- 5) 折口信夫, 折口信夫全集 第二卷, 中央公論社, 昭和30年, pp.142-143.  
     同上 第三卷, (昭和30年), pp.224-227.  
     同上 第二十卷, (昭和31年), pp.76-80.  
     同上 第廿九卷, (昭和32年), pp.340-342.  
     同上 (ノート編) 第一卷, (昭和46年), pp.221-224.  
     同上 第二卷, (昭和45年), pp.110-112.  
     同上 第七卷, (昭和46年), pp.590-591.
- 6) ミルチャ・エリアーデ, 風間訳, 聖と俗, 法政大学出版, 1978年, pp.121-125.
- 7) エリッヒ・ノイマン, 福島ら訳, グレート・マザー, ナツメ社, 1985年, pp.63
- 8) 荻野怨三郎, 古代日本の遊びの研究, 南窓社, 昭和57年, pp.213-231.
- 9) トーマス・インモース, 加藤恭子, 深い泉の国「日本」, 春秋社, 1985年, pp.78-95.
- 10) 李家正文, 水の生活史, 雪華社, 昭和38年, pp.70-73.
- 11) 萩原進, 万座温泉風土記, 国書刊行会, 昭和55年, pp.16-17.
- 12) 萩原進, 草津温泉史, 国書刊行会, 昭和55年, pp.108-109.
- 13) 武田勝蔵, 風呂と湯の話, 塙新書, 1990年, p 38, p 158.
- 14) 落合茂, 洗う風俗史, 未来社, 1986年, pp.14-15.
- 15) 小暮敬, 「湯治の歴史」, 合田純人編, 温泉と現代社会, 大島良雄, 1986年, p 15.
- 16) 中野栄三, 「温泉宿」, 日本風俗史 別巻4, 雄山閣, 昭和34年, p 124.
- 17) 草津町誌編さん委員会, 草津温泉誌 第一巻, 草津町役場, 昭和51年, pp.46-110.

- 18) 大林太良, 日本民族文化大系 第七巻, 演者と観客—生活の中の遊び—, 小学館, 昭和59年, pp.417—490.
- 19) 横井清, 「信仰から娯楽へ—中世における『大衆文化』の系譜」, 山本阿母里, ジュリスト増刊 総合特集 No.20, 日本の大衆文化, 有斐閣, 1980年, pp.13—18.
- 20) 武田, 前掲書, pp.37—96.
- 21) 落合, 前掲書, pp.24—48.
- 22) 小暮, 前掲書, pp.16.
- 23) 今野信雄, 江戸の風呂, 新潮社, 1991年, p.128.
- 24) 神崎宣武, 物見有山と日本人, 講談社, pp.138—140.
- 25) 草津町誌編さん委員会, 前掲書, p.125—126.
- 26) 中沢温泉研究所, 温泉草津史料, 第一巻, 中沢温泉研究所, 昭和51年, pp.224—246.
- 27) 六合村誌編集委員会, 六合村誌, 六合村役場, 昭和48年, pp.345—355.
- 28) 武田, 前掲書, p.128.
- 29) 折口信夫, 前掲書 (第三十巻), pp.39—40.
- 30) 頼祺一, 「草双紙に現れたる庶民の世界像」, 朝尾ほか編, 日本の社会史 第7巻, 社会観と世界像, 岩波書店, 1987年, pp.239—246.
- 31) 今野, 前掲書, pp.15—85, pp.111—122.
- 32) 寺門静軒, (朝倉ら校注), 江戸繁昌記1, 平凡社, 1989年, pp.234—235.
- 33) バーン・ブロー, ボニー・ブロー, (香川ら訳), 売春の社会史, 筑摩書房, 1991年, Pp.496.
- 34) 大場利康, 「江戸博物学入門」, 別冊宝島編集部, 江戸の真実, JICC, 1991年, pp.171—176.
- 35) 萩原進, 近世上州日記・紀行集, 国書刊行会, 昭和55年, pp.50—51.
- 36) 落合, 前掲書, p.87.
- 37) 岩崎宗純, 箱根七湯, 有隣堂, 昭和54年, pp.32—158.
- 38) 草津町誌編さん委員会, 前掲書, p.827.
- 39) 板坂耀子編, 江戸温泉紀行, 平凡社, 1987年, pp.305—322.
- 40) 萩原, 草津温泉史, 前掲書, pp.108—115.
- 41) 落合, 前掲書, pp.149—202.
- 42) 西山松之助, 江戸ッ子, 吉川弘文館, 昭和55年, pp.170—171.
- 43) W. ウェンストーン, (長岡訳), ウェンストンの明治見聞記, 新人物往来社, 昭和62年, pp.68—69.
- 44) F. S. モース, (石川訳), 日本その日その日1, 平凡社, 1991年, pp.86—93.
- 45) B. H. チェンバレン (高梨訳), 日本事物誌1, 平凡社, 1998年, pp.60—62.  
同上, 日本事物誌2, pp.74—76.
- 46) 西田峯吉, 増補版 鳴子・こけし・工人, 未来社, 1984年, p.32.
- 47) 田部重治, わが山旅五十年, 桃源社, 昭和39年, Pp.372.
- 48) 岩崎, 前掲書, pp.172—192.
- 49) 環境庁自然保護局監修, 温泉必携, 日本温泉協会, 平成2年, Pp.392. 大島良雄, 矢野良一, 温泉療養の指針, 日本温泉協会, 平成3年, Pp.133. 横山ほか編, 温泉医学, (教育研修

- 会講義録），日本温泉気候物理医学会，平成2年，Pp.394. 合田純人，健康と温泉 FORUM'86「温泉と現代社会」，大島良雄，1986年，Pp.95. 同上FORUM'88「温泉と社会制度」Pp.135. 同上FORUM'89「温泉とリゾート開発」，Pp.183. 同上FORUM'90「温泉と健康づくり」，Pp.251.
- 50) ローレンス・ライト，（高島訳），風呂トイレ賛歌，晶文社，1989年，pp.295-299.
- 51) 森浩一ほか，日本民俗文化大系 第14巻，技術と民俗（下）—都市・町・村の生活技術誌—，小学館，昭和61年，p.348.
- 52) 濱口恵俊，公文俊平，日本的集団主義，有斐閣，昭和63年，p.60-61.
- 53) 植田理彦，温泉はなぜ体によいか，講談社，1991年，p.45.
- 54) ピエール・ブルデュー，（石井訳），ディスタンクシオンI，藤原書店，1991年，p.192-193.
- 55) 木村洋二，「象徴的世界の4極構造モデル」，野崎治男編，価値意識の社会学的研究，ミネルヴァ書房，昭和56年，pp.1-35.
- 56) 西村秀樹，「遊びとカオス・コスモス—鎮魂における無意識のメカニズム—」，体育学研究，Vol. 33, No. 4，平成元年3月，pp.283-300.
- 57) 荻野恕三郎，前掲書，p.333.
- 58) 河合隼雄，母性社会日本の病理，中央公論社，1976年，pp.8-12.
- 59) E. ノイマン，（林訳），意識の起源史（下），紀伊国屋書店，1991年，pp.671-681.
- 60) C. G. ユング，（高橋，江野訳），現代人のたましい，日本教文社，昭和62年，pp.302-303.
- 61) オイゲン・フィンク，（千田訳），遊び—世界の象徴として，せりか書房，1976年，Pp.332.